



口絵1 金銅透彫舍利容器 奈良・西大寺

# 西大寺金銅透彫舍利容器の蓮華形銀器について

伊藤 旭 人

はじめに

奈良・西大寺が所蔵する金銅透彫舍利容器<sup>(1)</sup>（口絵1・図1）は、宮殿形あるいは燈籠形<sup>(2)</sup>とも呼ばれる独特の形状をした舍利容器で、中世の舍利莊嚴美術の名品として知られている。精緻な透彫装飾や三層構造となる舍利の納入方法、金銅製塔鏡形合子の蓋上に小型の坐仏像を安置する点などわが国に現存する舍利容器の中でも特徴的な



図1 金銅透彫舍利容器 奈良・西大寺

形式を示している。

さて、奈良国立博物館では、令和四年（二〇二二）四月二十三日から六月十九日にかけて、特別展「大安寺のすべて―天平のみほとけと祈り―」を開催した。後述するように、以前の修理時に見出された墨書銘によってかつて大安寺に伝来したことが判明した本舍利容器も本展に出品され、中世の金工技術の粋を尽くした表現は多くの来館者の視線を集めた。筆者は、展覧会の事前調査の際に本品の内部構造を確認するなかで、一部の部材の作風が他とは異なることに気づいた。それは本品の身内部で金銅製塔鏡形合子をのせる銀製の蓮華座（以下、蓮華形銀器という）である。

本舍利容器をめぐることは、以前より諸先学による研究がなされてきたが<sup>(3)</sup>、蓮華形銀器について指摘されることはほとんどなかったように思われる。そこで本稿では、本舍利容器の構造を改めて確認したうえで、蓮華形銀器について述べることにしたい。

## 一 金銅透彫舍利容器について

### （一）形状と技法

まず、本舍利容器の基本データを掲げる。

総高三七・〇センチメートル、金銅製金具を取り付けた木製黒漆塗の基壇に二重の金銅製基壇を重ねる。基壇はいずれも六花形、身部は円筒形で、基壇から伸びる柱によって身部は六面に区切られる。各面とも柱間は梁を渡して四段とし、最下段には格狭間を透かして、別製の獅子あるいは牡丹を高肉彫した金具で飾る。この飾金具の背面には柄があり、格狭間に開けた孔に差し込み、かしめることで固定している。その上段は上下に二分され、下は文様を透彫、鋤彫した羽目板を嵌めて、上は高欄をつける。透彫文様の羽目板は一面ごとくに意匠を変えており、宝珠を捧げ持つ龍・唐草文・牡丹唐草文・菊唐草文・蓮華唐草文・竜胆唐草文の六種が嵌められる。上方から金銅製金具や極小のガラス玉を連ねた垂飾を下っている。最上段は唐草文を透彫した羽目板で飾られる。屋蓋は六方に猪目を透かした六花形で、吹き返しは花卉形となる。軒下から蕨手を伸ばし、風鐸を下っている。風鐸の舌にも極小のガラス玉を連ねたものを取り付けている。屋蓋の上面は同心円状に紐帯を巡らせて四区に分け、頂上には蓮台にのる火焰宝珠（宝珠は水晶製）を奉安する。その外側の区画は魚々子地に日輪・三日月・剣を呑み込もうとする龍・瓶を傾ける龍の四つのモチーフを四方に表現し、さらにその外側の区画は伸びやかな蓮華唐草文を、六方の吹き返しはいずれも左右対称の蓮華唐草文が表現される。なお、最近の調査により、火焰宝珠を奉安する頂部のみ鍍銀であることが確認された。

身内部には円形の框座があり、その上に三本の獸脚をつけた蓮華形銀器（後述）がのり、さらにその上に金銅製塔鏡形合子をのせる構造である。合子は轆轤引きで仕上げ、胴部中央で合口とする。合子の蓋上には智拳印を結ぶ如来（大日如来もしくは一字金輪）が坐し、そ

の上に三重相輪形を配した天蓋をのせている。合子の内部には舍利を納める金銅製蓮華形舍利容器が奉安されていたが、現在は別に保管されている。

円形の框座と獸脚、獸脚と蓮華形銀器はそれぞれ鋏留めとし、また蓮華形銀器と合子は、蓮華形銀器の蓮肉部分に嵌めた別材と合子の脚部を鋏留めして接合している。

## （二）伝来

本舍利容器は従来、叡尊が寺内において感得した舍利を祀ったものという寺伝を有することから、叡尊に係する遺品として考えられてきた。

しかし、以前の修理時に木製基壇と金銅製基壇の間に嵌め込まれていた補填材に墨書銘が確認された。すでに広く知られたものではあるが、左記に掲げておく。

### 大安寺舍利殿

文明三年（辛／卯）十二月廿六日奉修理之了

住持沙門恩澄 奉行芙蓉筭

一藪圓海 飭師京圓阿彌

并悲母吉次 次郎左衛門

権大工平四郎

この銘文により、本舍利容器はかつて大安寺に安置されていたことが明らかとなり、文明三年（一四七一）に修理が完了したことが分かる。この時に行われた修理についてはすでに指摘があるとおおり、

金銅製の本体の根幹に及ぶ大きなものではなく、屋蓋から垂下する瓔珞の補修や基壇の補強にあったと推測されている<sup>(4)</sup>。

ちなみに銘文中の「大安寺舍利殿」については、現状二つの解釈がなされており、意見の合致を見ていない。すなわち、本舍利容器の名称が「大安寺舍利殿」であったとする見方と本舍利容器が大安寺舍利殿に伝来したとする見方<sup>(5)</sup>である。解釈が分かれるところであるが、「大安寺舍利殿」が後者の所在を意味する場合、やや唐突の感が免れない。前者の名称として解釈すれば、「大安寺舍利殿」と呼ばれる本舍利容器が文明三年に修理されたと読めるのではないだろうか。また、本舍利容器が屋蓋のある宮殿形であることを踏まえて、筆者は前者の解釈に従うこととする。

「大安寺舍利殿」こと本舍利容器に納められる舍利について、関根俊一氏は塔鏡形合子に納入する点に注目され、大安寺に住した菩提僊那請来の舍利を奉籠するために奈良時代に盛行した形式を踏襲する<sup>(6)</sup>という復古的な性格によって制作されたと推測している。『東大寺要録』巻第二「供養章第三 開眼師伝来事 元興寺小塔院師資相承記」によると、菩提僊那は鍮石香炉や菩提子念珠、多羅葉梵字などととも「仏舍利二千粒」を請来した。この舍利は天皇に献納された後分配され、その多くは元興寺小塔院に奉置されたという。

## 二 蓮華形銀器

先述したように、本品の身内部には三脚をつけた蓮華座上に舍利を納める塔鏡形合子が安置されている。本舍利容器の本体は金銅製であるにもかかわらず、合子をのせる蓮華座のみ銀製とみられ、ま

た透彫文様の羽目板や屋蓋に見られる蓮華の形式とは作風を異にしている。

従来、この蓮華形銀器については「銀板かぶせ」や「銀板貼り」の蓮華座として取り扱われることが多く、詳細に言及されることはなかった。関根俊一氏は、本舍利容器についての論考のなかで蓮華形銀器にも触れられている。関根氏は、銀板で覆った蓮華座は仏に叶う仏舍利を丁重に扱うための造作と考えてよいと指摘しているが、後述するようにかなり特殊な形状、作風が看取され、単に造作の一部とするには疑念が残る。私見によれば、蓮華形銀器は単に「銀板を貼った蓮華座」ではなく、「銀製の蓮華座」ではないかと推測した。

先に述べたように、蓮華形銀器は六面の羽目板で囲まれており、外観の全容をうかがうことは困難である。また三本の獸脚によって円形の框座と鎮留めされていることから、現状取り出すことは不可能である。そのため、内部構造を詳細に撮影できる光学調査（X線CT撮影）を実施した（図2～7）<sup>(9)</sup>。

本章では、光学調査によって得られた知見を踏まえて、蓮華形銀器本体の構造と作風に着目し、類例との比較検討を行って制作時期を推定したい。次に、本舍利容器との関連について若干の考察を加えたい。このことについて以下に述べる。

### (一) 概要

#### ① 法量<sup>(10)</sup>

最大幅 八・〇九センチメートル  
高さ 一・六二センチメートル  
高台高 〇・四一センチメートル



図3 同右 断面 (X線CT画像)



図2 透彫舎利容器 身内部 (断面) (X線CT画像)

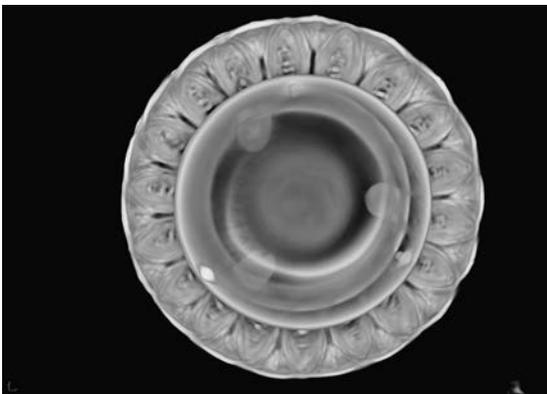


図5 同 俯瞰 (X線CT画像)

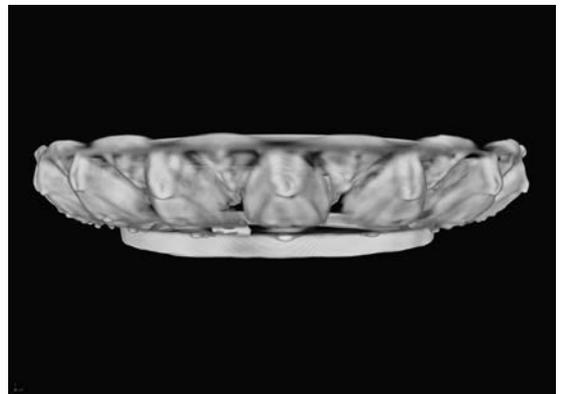


図4 蓮華形銀器 側面 (X線CT画像)



図7 身内部における蓮華形銀器 断面 (X線CT画像)



図6 同 斜め下から見上げる (X線CT画像)

高台径 五・四四センチメートル

② 形状と技法

蓮華形銀器は花弁(図8)を単弁十八葉で表し、底部には低い高台を有する皿状の器物である。蓮弁は立体的な膨らみをもって外側へ大きく張り出して、各弁には中央に宝相華文を表し、その周囲は外側に向かって放射状に弁脈を表している。宝相華文と弁脈の間地は、魚々子とみられる小円文で埋めている。底部には円形の低い高台をつけ、高台の内側の三箇所に獸脚を鋳留めしている。現状、表面は黒色化しており、各蓮弁の間には鍍金とみられる彩色が確認できる。本銀器の口径部分を見ると非常に薄作りであることが確認でき、ベースは鍛造製とみて間違いない。

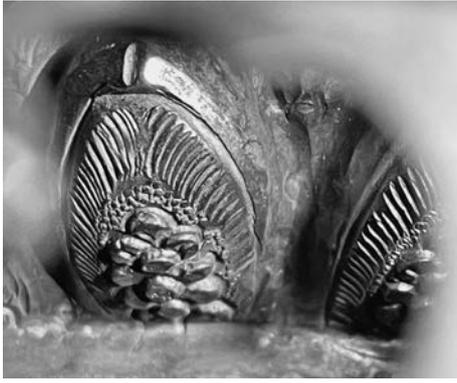


図8 蓮華形銀器 蓮弁部分

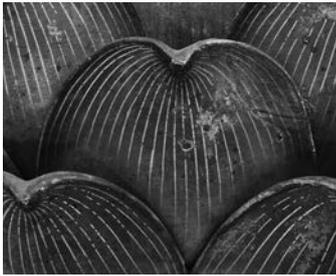


図10 蓮弁の弁脈が先端に向かって集まる形式の例  
(写真は奈良国立博物館所蔵  
愛染明王坐像〔鎌倉時代 建長  
8年(1256)〕台座 部分)



図9 正倉院宝物・螺鈿紫檀阮  
威 花文の書き起こし

以上のように、従来「銀板かぶせ」や「銀板貼り」とされてきた蓮華形銀器は、今回実施した光学調査によって表面に銀板を貼るのではなく、鍛造製の銀器であることが明らかとなった。さらに、これにのせる塔鏡形合子は、蓮華形銀器の口縁部に噛ませた円形板に鋳留めして接合されていることも明らかとなった(図7)。

(二) 作風上の特色

本銀器に見られる蓮弁(花卉文)は蓮弁中に宝相華文を立体的に表し、弁脈を外側に向かって放射状に線刻する点など非常に緻密な作風が見て取れる。

先述したように本舍利容器には、身内部の塔鏡形合子に納められた蓮華形舍利容器や屋蓋の頂部に奉安される火焰宝珠がのる蓮台、さらには屋蓋の上面に表された蓮華唐草文など数箇所において蓮華あるいは蓮台の表現が見られる。しかし各蓮弁をみると、これらはいずれも頂部に集約するような弁脈を刻んでおり、蓮華形銀器とは表現の統一が見られない。つまり、本舍利容器の制作にあたって、部材のひとつである蓮華形銀器は敢えて本体とは表現を変えて制作されたのか、それとも別の作品(あるいは作品の一部)を流用したことが推測される。

そもそも、蓮華形銀器に見られる蓮弁表現はわが国に現存する蓮華座(仏像や舍利容器をのせる台座)や花卉文とは大きく異なっている。むしろこのような蓮弁表現は、中国・唐代(八〜九世紀)の遺跡から発掘された金銀器によく見られる花卉形の装飾と近い印象がある。

いくつか代表的作例を掲げると、中国・法門寺塔基地宮後室出土

の鍔金十字三鈷杵紋銀闍伽瓶<sup>(11)</sup>の身下部と高台には先述した特徴をもつ蓮弁帯を巡らせており、同・何家村出土の鍔金鑿花銀蓋碗<sup>(12)</sup>には放射状に弁脈が広がる花卉に葉を有する花卉形を線刻している。唐代の金銀器に見られる文様については冉万里氏による研究があり、氏によればこの種の花卉文は唐代の金銀器の装飾文様としてよく採用される代表的なものである<sup>(13)</sup>という。

ところで、この種の花卉文(蓮弁表現)は金銀器に限ったものではなく、同時期に制作された美術工芸品に散見される。

八世紀の制作とされる正倉院宝物・螺鈿紫檀五絃琵琶「北倉二九」や螺鈿紫檀阮咸「北倉三〇」には、蓮華ではないとみられるものの、螺鈿で花文(ただし一部は明治時代の新補)を表しているが、どちらの宝物も花卉の縁には外向きの弁脈を線刻している(図9)。

また、少し時代が下るが、京都・清涼寺釈迦如来立像の台座例に挙げることができる。清涼寺釈迦如来像の台座は、反花上に仰蓮を重ねたもので、仰蓮には截金によって外側に向かう弁脈を表している。このことについては奥健夫氏による指摘があり、切金線による弁脈が弁の根元から縁に向かつてゆるく放射状に開いていく形式は、平安末期以降に現れ鎌倉時代に一般化する尖端に向かい弁脈が集まる形式(図10)より古い<sup>(14)</sup>としている。

このように蓮華形銀器に見られる蓮弁、すなわち蓮弁中に宝相華文を表し、外側に向かつて弁脈を表す蓮弁表現は、中国・唐代の金銀器によく見られるもので、また同時期の制作とされる工芸品にも同形の表現が認められた。従って、本舍利容器に使用される蓮華形銀器は、中国で制作されたものが日本へ持ち込まれ、それが用いられたと考えられるのである。

### (三) 制作時期

本舍利容器の制作時期については、正応三年(一二九〇)銘を有する奈良・海龍王寺火焰宝珠形舍利容器との技法や表現の類似性から十三世紀後半とする見解と、それよりも下る十四世紀とする見解に分かれている。近年、酒井元樹氏により、本舍利容器にみられる飾金具の作風が十四世紀の刀装具や調度品に用いられる飾金具に近いとする見解が出され、本舍利容器に関する研究は大きく進展した<sup>(16)</sup>。

酒井氏の論考では、屋蓋上面や六面の羽目板の装飾文様に主眼を置いて検討が加えられたが、本稿では蓮華形銀器に視点を当てて考察を進めることとした。先に確認したように、蓮華形銀器は舍利容器本体とは様式、作風を異にしており、制作時期を分けて考えるべきであろう。では、蓮華形銀器の制作時期はいつに置くべきだろうか。

すでに述べたように、蓮華形銀器の様式や作風は唐代の金銀器に見られる花卉文と近似することは明らかである。しかし細部の表現に着目すると、作風上に差異が認められる箇所がいくつかある。

一つ目は、蓮弁の各頂部に僅かな凹みをつけている点である(図8)。先に掲げた唐代の金銀器や同時期に制作された遺品のなかでこのような凹みをつける作例は管見に触れない。花卉の頂部に凹みをつけた作例には、中国・長干寺址出土の金銀器などを挙げることができる。長干寺址は南京市の市街地に位置し、大中祥符四年(一一〇一)の年紀を有する高さ一一九・〇センチメートルもの巨大な阿育王塔をはじめ、同時期の制作とみられる金銀器が複数出土している。出土した金銀器の中には蓮華形銀器と蓮弁表現が酷似するものがある。



図11 銀椀 中国・南京市博物館

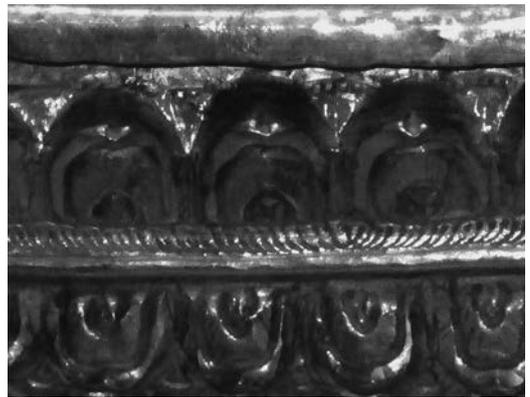


図12 同 部分

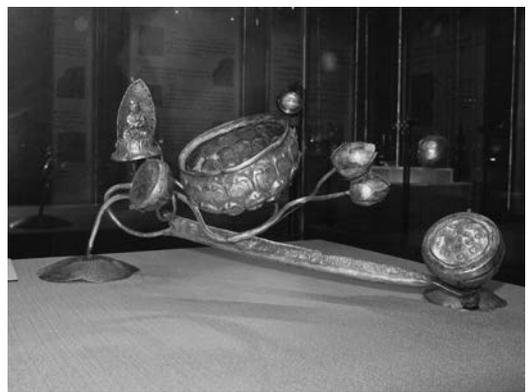


図13 鎏金蓮花宝子香炉 中国・南京市博物館



図14 同 火炉底部

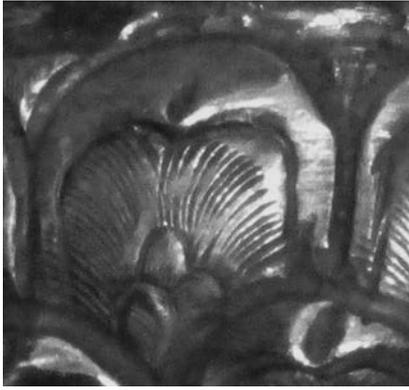
まず、銀椀(図11・12)は、蓮弁や宝相華文で豪華に裝飾された宣字座状の台座に銀製の箱型容器をのせた品である。宣字座状の台座を飾る蓮弁文様を見ると、逆U字形の花弁の中には宝相華文があり、その周囲は外側に向かって弁脈を刻んでいる。各弁の頂部に凹みをつける点も同じである。また、各弁の間地に少し凹凸が見られる点も蓮華形銀器とかなり近いものがある。

鎏金蓮花宝子香炉(図13・14)にも同様の表現が認められる。この香炉は蓮華形柄香炉の遺品で、柄の先端が蓮莖状に分かれて、蓮華(火炉)、荷葉(台脚)、さらに蓮華座に坐す化仏、未敷蓮華を伸ばしている。柄端は開敷蓮華をつけて鎮子としている。火炉に表された蓮弁裝飾を見ると、先に見た銀椀より表面の張りが抑えられているものの、ほぼ同形の蓮弁を表している。同様の表現は鎏金銀浄瓶の高台にも見ることができ、この時代の蓮弁表現の特色を表しているのだろう。このような蓮華形柄香炉は中国・宋代に源流が求められ

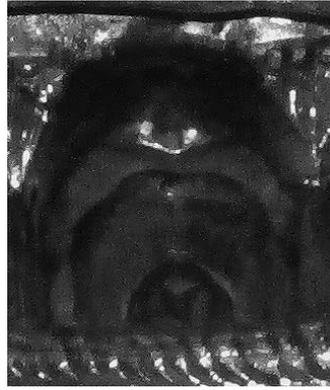
ると指摘されており、先に掲げた作例のほか、台北・国立故宫博物院所蔵の蓮華形柄香炉〔宋代(十〜十三世紀)や韓国・国立中央博物館所蔵の蓮華形柄香炉〔北宋代 熙寧十年(一〇七七)〕などの遺品が知られている。また、高麗期に制作された仏画中の羅漢像が蓮華形柄香炉を捧持する例も確認されている。

二つ目は、蓮弁表現に見られる形式化である。唐代の金銀器に表された花卉文(蓮弁表現)は非常に柔和な作風で、尚且つ均整のとれた文様配置が成し遂げられている。しかし蓮華形銀器では、高肉彫を彷彿とさせる立体感のある宝相華文を表す点や弁脈の線刻に粗さが見られる点など唐代の裝飾技法とは異なった作風を示している。

蓮華形銀器における蓮弁の各頂部に僅かな凹みをつける表現は、おそらく蓮弁の先端が反り返るにあたって頂部が僅かに下がった時の姿を形式的に表したものと考えられる。これについては、先に述べた銀椀や鎏金蓮花宝子香炉の蓮弁表現を見れば、この技法の意味



③ 鑿金蓮花宝子柄香炉



② 銀椀



① 蓮華形銀器

図15 各蓮弁の拡大

を解釈できよう。楕円形の鑿を打ち込み凹ませることで、蓮弁の頂部の反り返りを具現化している。従って、蓮華形銀器に認められる同様の表現も同じ意図による所作とみられる。

このように、蓮華形銀器の作風や細部の意匠は、中国・長干寺址出土の金銀器とかなり近い特徴をもっていることが指摘できる。蓮華形銀器が長干寺ゆかりの遺品であるか現段階では全く不明であるが、これまで見てきたように両者の作風の近似、すなわち制作時期や制作環境の近さは首肯されるであろう。本舎利容器の一部材である蓮華形銀器が、熱心な阿育王舎利信仰ゆかりの地からもたらされたものとするれば非常

に興味深い。しかしながら、それを証明するためには更なる考察を必要があり、ここでは問題提起をするに留めておく。

### おわりに

以上本稿では、金銅透彫舎利容器の身内部で塔鏡形合子をのせる蓮華座について様式、作風の観点から考察を行った。従来、蓮華形銀器については「銀板かぶせ」あるいは「銀板貼り」の蓮華座として扱われることが多く、本品を単体で考察されることはなかった。

今回の考察によって、蓮華形銀器に認められる様式や作風は、中国・北宋代の遺品、なかでも長干寺址出土の金銀器と極めて近いことが確認された。つまり本舎利容器は、中国から請求された珍貴な品を取り入れて制作されたと考えられる。わが国と北宋の関係では、寛和二年（九八六）に東大寺僧・奝然が釈迦如来像や十六羅漢像（いずれも京都・清涼寺に現存）を請求しており、また鎌倉時代に重源は阿育王山舎利殿のために「周防国御材木」を寄進するなど密接な交流がうかがえる。

ところで、本舎利容器の身内部の形式―獣脚を付けた台に合子をのせる―は、韓国・高麗期（十一～十三世紀）の青銅香炉とも近い。例えば、奉業寺銘の青銅香炉や蔚山靈鷲寺跡出土の青銅香炉などが挙げられるが、これらはいずれも脚付きの台に鏡形の火炉をのせる形式であり、さらに脚は三本であることも本舎利容器に通ずる特徴である。

本稿では、蓮華形銀器がわが国へもたらされた経緯や具体的な時期、関係した人物についての考察には及んでいないが、想像を逞し

くすれば、日本と東アジア諸国との交流関係のなかでもたらされた可能性が高いように思われる。筆者の今後の課題である。

## 注

- (1) 国宝指定名称は「金銅透彫舍利塔」であるが、本稿では一般的な呼称である「金銅透彫舍利容器」と呼ぶ。
- (2) 「燈籠形」とする見方について、関根俊一氏は釈迦に叶う仏舍利を納置するものとして仏堂を意識していることは明らかであることから、表現上適切ではないと指摘している。関根俊一「南都における中世舍利莊嚴具の展開(二)」『佛教藝術』二〇四、一九九二年九月、毎日新聞社)一〇四頁、注59参照。
- (3) 注2関根氏前掲論文のほか、守田公夫「西大寺の舍利塔」(『大和文華』二〇、一九五六年六月)、岡崎讓治「西大寺の金工品」(『佛教藝術』六二、一九六六年十月、毎日新聞社)、岡田讓「叡尊と西大寺の工芸」(『奈良の寺』二一、一九七四年十一月、岩波書店)、酒井元樹「西大寺所蔵金銅透彫舍利容器について」(『美術史』一七〇、二〇一一年三月、美術史学会)など。
- (4) 注2関根氏前掲論文 九七頁、注3酒井氏前掲論文 一六六〜七頁。
- (5) 注2関根氏前掲論文 九七頁。
- (6) 鈴木友也「金銅透彫舍利塔」作品解説(文化庁監修『国宝』六 工芸品I、一九八四年十二月、毎日新聞社)一六四頁、内藤栄「金銅透彫舍利容器」作品解説(奈良国立博物館編『仏舍利と宝珠―釈迦を慕う心―』、二〇〇一年七月)一二七頁。
- (7) 守田公夫氏は、錫製と指摘している。注3守田氏前掲論文 二二頁。
- (8) 注2関根氏前掲論文 九七頁。
- (9) 光学調査(X線CT撮影)は、令和五年一月十一日に奈良国立博物館光学調査室にて実施した。撮影は荒木臣紀氏(奈良国立博物館)が行い、画像は安藤真理子氏(同)が作成した。また、作品の取扱いには、三本周作(奈良国立博物館)、三田覚之(同)の各氏のご協力を得た。撮影条件は以下のとおり。

### 装置概要

大型文化財用X線CTスキャナ装置(エクスロン・インターナショナル社製)

X線発生装置(Y・CTプレシジョン三二〇)、受光装置(XRD一六二〇)、受光装置  
X線発生装置間距離約一六三〇ミリメートル

### 撮影条件

電圧三二〇キロボルト、電流二・〇ミリアンペア、焦点寸法〇・四ミリメートル、  
X線受光時間  
五五〇ミリ秒一回、分割撮影枚数一六二〇枚  
画像処理ソフト

- (10) 法量は、光学調査で得たデータをもとに計測した。計測に当たっては安藤真理子氏のご協力を得た。
- (11) 作品名称は『中国美術全集』(金銀器玻璃器一、二〇一〇年十二月、黄山書社)に従った。
- (12) 同右。
- (13) 冉万里『唐代金銀器文様の考古学的研究』(二〇〇七年五月、雄山閣)二五二〜三頁。
- (14) 奥健夫「清凉寺釈迦如来像」(『日本の美術』五一三、至文堂)六七〜八頁。
- (15) 注3岡崎氏前掲論文 一一六〜七頁、注3岡田氏前掲論文 十〜十一頁、注3酒井氏前掲論文 一六六〜一七二、一七六頁。
- (16) 注3酒井氏前掲論文。
- (17) 加島勝「柄香炉と水瓶」(『日本の美術』五四〇、二〇一一年五月、ぎょうせい)五〇〜五一頁。

### 〔挿図出典〕

- 口絵1・図1・10…奈良国立博物館  
図2〜7…荒木臣紀氏(奈良国立博物館)撮影、安藤真理子氏(同)作成  
図8・15①②…筆者撮影  
図11〜14・15①②③…三田覚之氏(奈良国立博物館)撮影

### 〔謝辞〕

本稿は令和四年(二〇二二)に奈良国立博物館で開催した特別展「大安寺―天平のみほとけと祈り―」の事前調査で得た知見をもとに、その後の調査

成果を踏まえて執筆したものです。

本稿をなすにあたり、西大寺より多大な御高配を賜りました。ここに記して謝意を表します。また、本文中の挿図に関しては、西大寺、南京市博物館に御高配を賜りました。篤く御礼申し上げます。また光学調査（X線CT撮影）では、奈良国立博物館学芸部の荒木臣紀氏、安藤真理子氏、三本周作氏、三田覚之氏の御協力を賜りました。篤く御礼申し上げます。

（いとう あきひと／奈良国立博物館学芸部研究員）

奈良国立博物館研究紀要

## 鹿園雑集

第二十五号

令和五年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8233

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社

天理市稲葉町八〇番地